

ポール・マクヒュー、フィリップ・スラヴニー [著]

澤 明 [監訳]

『マクヒュー／スラヴニー 現代精神医学』

評者 村井俊哉

読者の皆さんは、精神医学の教科書を一冊通読したことがあるだろうか。ここで教科書というのは新書レベルの入門書ではなく、精神医学総論と各論を備えた厚めの本のことである。おそらく、イエスと答える人はほぼ皆無であろう。実際、教科書を制作する側自体が、通読を期待して本を作っていない。著者が何十人もいて、それぞれが分担で執筆しているので、本全体が一つのストーリーをなしておらず、通読には耐えないのである。

今日、精神医学の包括する範囲はあまりに広がっている。そういう意味では、執筆する側の能力の限界もあり、精神医学全体について一人で書くことなどほぼ不可能であるし、一方で読む側の事情からも、とりあえずは自分にとって必要な部分をしっかり読みたいわけである。

そのような今日の教科書のあり方は、それはそれで正しいことになるが、そのようなスタイルの教科書では欠け落ちてしまう大切なことがある。それは、精神医学が全体として何なのか、という問いに答えることである。

『マクヒュー／スラヴニー現代精神医学』として訳出された本書は、この問いに答えてくれる良書である。「精神医学とは何か」、あるいはもう少し正確に言えば「精神医学全体をどのような構造で理解することが有用なのか」について、本書は、総論、各論を通じてぶれることのない視点で答えていく。

原著タイトル *The Perspectives of Psychiatry* に示されているように、本書では、精神医学において問題となる病態を、複数（具体的には疾患、特質、行動、生活史の4つ）のパースペクティブに分けて考える。疾患の観点からの理解が適切な病態はたとえば統合失調症であり、特質の観点からの理解が適切な病態はたとえばパーソナリティ障害である。パースペクティブが違えば対象とする病態が異なるだけでなく、精神科医療がその病態に働きかけることでいったい何を指すのかという目標も異なることになる。

この考え方は、とくに、操作的診断基準 DSM-III（1980年）が日本に浸透する前に精神医学教育を受けた世代の読者には、非常にわかりやすいものに映るだろう。その世代の読者が馴染んできたが今日の教科書からは消え去った心因・内因の区別など、いわゆる伝統的精神医学の考え方に本書は近いからである。実際、この本の初版が書かれたのは、DSM-III が出版された時期から間もない1983年であり、操作的診断基準によってわかりにくくなった精神医学の概念的構造をはっきり目に見えるようにしたいというのが、著者らが本書を出版した動機の一つなのである。

一方で、初めから操作的診断基準を常識として精神医学を学んだより新しい世代の専門職の方(デジタルネイティブの語に倣って、DSM ネイティブとでも呼ぶのがよいだろうか)にも、本書はお勧めである。専門職試験の対策などで丸暗記を余儀なくされた大量の知識の中には、どう考えても互いに矛盾しているところがあるところもあつたはずである。そうした疑問に対して、みなさんが手にしている試験対策のテキストはおそらくは答えてくれないだろうが、本書の中にその答えは見つかるかもしれない。

訳出の元になった原著の第2版の出版から考えてもすでに20年の時が経っているが、監訳者の澤明教授が冒頭の「読者への手引き」で述べている通り、本書の意義は今日ますます高まっている。21世紀の精神医学が大変な速度で変貌を遂げる時期であるからこそ、なおさらこの分野の専門職は、みずからの職業の対象である精神医学・精神疾患に対して、確固たる perspectives (複数の観点) を必要としているのである。